



# 小山台

学校だより

5月号

令和8年4月28日

横浜市立 小山台小学校

## 子どもの可能性を広げる大人のかかわり



校長 堀江 公子

新緑が目まぶしい季節となり、正門の花や校庭の芝生が元気に登校してくる子どもたちを迎えています。先日は、ご多用のなか授業参観や懇談会にご来校いただき、誠にありがとうございました。子どもたちは新しい学年になり、やる気いっぱいそれぞれの活動に取り組む姿がたくさん見られます。

4月の朝会では、新年度のスタートを新たな気持ちで頑張っている子どもたちに、「よりよい学級や学校は、みなさん一人ひとりがつくるもの」というお話をしました。そのためには、「よくなるためにはどうすればよいか考え、実行する。また、もっと工夫できないかな、とアイデアを出し挑戦する。」ことが大切とも伝えました。

ここで、スタンフォード大学の心理学者たちが行った、褒め方が子どもの動機づけや挑戦行動に与える影響に関する研究を紹介します。それは、小学校5年生400人余りを対象に行ったもので、まず、子どもたちに簡単な図形のパズルを与えます。そして、テスト終了後に子どもたちにテストの点数を伝え、褒めます。成績内容にかかわらず一人ひとりの子どもを褒めるのですが、半数の子どもたちには、「あなたは、頭がいいね。」と子どもの「賢さ」(能力)を褒めます。残りの半数の子どもたちには、「一生懸命やったね」というように、子どもの「努力」(過程)を褒めます。その後、2回目のテストをすることを伝え「1回目と同程度の易しいテスト」にするか、「1回目よりも難しいが、挑戦しがいのあるテスト」のどちらかを選ぶように伝えました。すると、賢さを褒められた子どものほとんどが、楽にできるほうを選びました。また、その後の成績は低下したそうです。一方、努力を褒められた子どもは、9割近くが難しいパズルにチャレンジしました。さらに成績も向上したのです。

賢さを褒められた子どもは、自分を賢く見せるために間違うのを恐れるようになるという、努力を褒められた子どもは、さらに努力を認められるように難問にチャレンジするというのです。研究は視点の一つにすぎないかもしれませんが、周囲の大人のかかわりの大切さを示しています。

このことは、学校生活においても大切な示唆を与えてくれます。子どもを結果や能力で褒めるよりも、「よく頑張ったね」「工夫したね」と努力や過程を認めることで、子どもたちは失敗を恐れず、より挑戦しようとしています。そして、努力を認められた子どもたちは、自分の成長を信じ、次の一歩を踏み出す力を身に付けていくのです。

今年度も私たち教職員は、学校教育目標の実現に向け、結果だけでなく、その過程に目を向け、子どもたちの挑戦を温かく支えながら、子どもたちが自ら問題を解決していこうとする力を育てていきたいと考えます。5月も引き続き、ご支援とご協力をよろしくお願いいたします。



子どもたちの学校生活の様子については、小山台小学校のホームページ「学校日記」に随時掲載しています。ぜひご覧ください。

